

2 教職員としての心構え

1 やりがいのある教職員のつとめ

自分の身近なところに子どもたちの息吹を感じながら教職員としての仕事ができることはすばらしいことである。いくつもの瞳が、自分を待ち望んでいてくれるような職場は、そうどこにもあるものではない。

日々の授業の進め方、生徒指導上の複雑な問題など、教職員の毎日は多忙で悩みも多い。それにもかかわらず、それが喜びや生きがいになっていくところに教職のすばらしさがある。

日頃あまり発言しない子どもが発表したり、授業で目を輝かせたりしたとき、また、子どもと本当にうちとけて語り合うことができたときなど、教職員はやりがいを感じるのである。

2 学び続ける教職員

子どもたちはもちろんのこと、保護者、地域は教職員に対して期待を抱いている。子どもにとって、日々共に過ごす教職員の影響ははかり知れないものがある。自分の言動が子どもたちの人格形成に関わるとなると、改めてその職責の重さに身が引き締まる思いである。どんなに優れた教職員でも完璧な人間であるわけではないが、この責任の重さを感じるとき、教職員は自分の良心にかけて自己形成（研修）に努めていこうという気持ちになる。

学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、探究心をもちつつ自律的・継続的に知識・技能を学び続けるからこそ、子ども一人一人の学びを最大限に引き出すことができる。共に伸びようとする者のみが子どもたちに最もよい影響を与え、保護者・地域からの信頼を得ることができるのである。

3 授業づくりに励む教職員

教師にとって授業はその職の中心に位置付けられ、だれもが「よい授業」を実践したいという強い願いをもっている。ただし、子どもたちは多様であり、指導案どおりにはいかないことも決してめずらしいことではない。授業の主役は教師ではなく、あくまでも子どもたちである。子どもたちが学習意欲を高め、資質・能力を身に付けていくにはどうすればよいかを求め、絶えず子ども理解に努めながら、教材研究、授業実践を積んでいきたいものである。

4 教育環境を整える教職員

教職員の日々の行動をはじめとして、授業以外の要素が、子どもたちに大きな影響を及ぼしている。教室をはじめ、校内の整理・整頓、掲示物の配置や内容はもちろん、教職員の服装、言葉遣い、話しぶりは教職員の人柄をそのまま表すものであり、子どもたちの最も身近な教育環境として重要な役割をもっている。

とりわけ、常にコミュニケーションの手段として用いる教職員の「言葉」については、日頃から研鑽を積み重ねていく心掛けが必要である。

5 子どもの発達を支える教職員

子どもたちは、多様な他者との関わり合いや学び合いの経験を通して、学ぶこと、生きること、働くことなどの価値や課題を見だし、自らの生き方や人生の目標を徐々に明確にしていく。教職員には、子どもたちの主体的な選択・決定を促し、子どもたちの自己指導能力を育てていくことが求められている。

そのためには、子どもたち全体に対して必要な指導や支援を行うだけでなく、一人一人が抱える課題に、個別に丁寧に対応することが欠かせない。子どもたち一人一人の発達を支えていくという心構えを常にもち続けたい。

6 先輩や同僚に学ぶ素直さ

授業の進め方、学級経営、分掌業務などが思うようにいかないときがある。その時は先輩や同僚に相談することを心がけたい。豊富な体験から有益な助言を得ることができるばかりではなく、相談された側にとっても貴重な財産となる。また、相談しようとする相手がたとえ後輩だとしても、教えられることは少なくないはずである。あらゆる立場の人たちからの助言に素直に耳を傾け、自らの実践を改善していきたい。

7 地域社会とともに子どもを育む教職員

教職員はともすると、教職員という立場のみでものを見たり考えたりしがちである。しかしながら、子どもたちは学校のみで育つものではない。教職員は地域の人々と交わり、地域の活動にも可能な限り参加して視野を広めたいものである。

学習指導要領改訂の柱として「社会に開かれた教育課程」が挙げられる。その実現のためには、地域社会に何かを「してもらおう」だけでなく、「学校は地域社会のために何ができるか」という視点を持ち、その実現に向けて歩もうとする姿勢が重要である。このことではじめて地域社会の信頼を得ることができ、地域の人材の協力を得たり、地域の産業、伝統文化、自然環境等を生かした教育活動が展開できたりする。

8 組織の一員としての教職員

学校が直面する様々な教育課題を克服するためには、個々の教職員が個別に教育活動に取り組むのではなく、組織として教育活動に取り組む必要がある。

そのためには、すべての教職員が学校教育目標をよく理解して共有することや、教職員がお互いに気軽に話ができる、困ったときに相談に乗ってもらえる、改善策や打開策を親身に考えてもらえる等の受容的・支持的・相互扶助的人間関係の形成が欠かせない。組織的かつ効果的に教育活動を実践するには、教職員同士が支え合い、学び合う同僚性が基盤となる。

また、教職員自らが学校教育目標に基づいた自己目標を持ち、折々に自らの実践を振り返ることによって自己の取組の改善を図り続ける姿勢が必要である。